



第1回OB小屋作業 (実行記録)

(_____はダムへ車を入れる人)

5月11日(土)

*午前6時半 工学部前集合 登山道補修A隊(BH-新道-高三郎-旧道)

CL岡部 伸一(18期) 上馬 康生(15期) 山上 正彦(16期)

島林 仁司(10期) 新道700m付近まで。あと釣り。BH戻る。)

(椿川 作業道具を積んでダムサイトへ。道具配布後、B隊に合流。5時まで作業後、帰宅)

*午前8時 工学部前集合

登山道補修B隊(BH-旧道-800m付近まで 5時にBHへ戻る)

CL椿川 利弘(18期) 坂尻 忠秀(15期) 舟田 節子(15期)

田村 昭夫(3期)個人装備搬入にダムとBH間を往復)

小屋作業本隊 (BH周辺、階段補修)

CL辰野 隆義(13期) 吉田 穂積(13期) 吉本 良治(13期)

北川 隆次(16期)

*個別入山

梅 典雅(19期) 梅 陸美(21期) ダムからBHまで資材運搬後下山。

清水 重仁(16期) 中野 淳一(16期) 出島で本隊と合流。B隊に参加。

5月12日(日)

*日帰り隊 金沢駅8時発

CL鳥越 伸博(23期) 南 梅子(13期)

*個別入山 大島 良治(13期) 10時BH着



新道、旧道とも作業可能区間(後は残雪の下で不可)は11日で完了。12日は、全員でBH周辺を整備。階段補修、水場確認、小屋周辺伐開、整地、残材区分、焼却。ベンチ作り。作業道具の跡始末。小屋の掃除。

10時半 早帰り組(島林 山上 清水 中野)下山。田村---ダム事務所へ挨拶

2時 全員下山

*お食事

買い出し、食当CL舟田

(13人分)

11日(土) 夕食

岩魚の骨酒(島林さんの釣った大物)

天麩羅(たらの芽、こごみ…現地調達) うど、薩摩芋

カタクリ、ワサビも揚げて食べてみた

味噌鍋 白菜、ネギ、豚肉、味噌 その後煮込みうどん

他…花ワサビの醤油漬け、ウドのきんぴら

蛸のワサビ醤油、ホタルイカとワカメの酢味噌和え

イラクサいため(上馬さん推奨の なかなか食べられない山菜)

おつまみ多数 お酒も多数



12日(日) 朝食

ご飯 味噌汁(ネギ ナメコ) 丸干し鰯 梅干し 漬物 ふりかけ

昼食 パン きゅうり ハム ウィンナ チーズ マヨネーズ 紅茶

*BH常設作業道具

両刃ノコ 2	アナ引ノコ 7	ナタ 5
金槌 2	カケヤ(中) 1	大槌 1
鍬(ステンレス) 2	剣コップ 2	スコップ 2
ツルハシ 1	ペンチ 2	
ステンレス針金 60m	釘 大 中 小	
ポリバケツ 3	タッパーウェア(中3)	砥石 2
草薙鎌 5	ローソク 20	トレペ
荷作りヒモ	赤布	スプレー錆止め
鍋 4	やかん 1	
包丁 2	お玉 2	まな板 2
携帯コンロ 2	ガスボンベ	救急箱
背負子(辰野)	トランシーバー(舟田)	
チェーンソー(田村)	カメラ(上馬 舟田…補助金報告書用)	

差し入れ— ありがとうございました —

3期 高島 誠様 金封	5期 稲葉 正己様 金封
10期 島林 仁司様 金封	13期 辰野 隆義様 罐ビール
15期 金井 澄様 ビール券	16期 清水 重仁様 罐ビール
26期 山口 雪枝様 ジョニ黒	

山小屋酒場の提案

13期 辰野 隆義

昨年秋の「月見の宴」で久しぶりにベルクハイムに行きました。その時の印象として感じたことは、今のワンゲルにはあまり必要のないものなのだろうか？という疑問と、寂しい気持ちでした。

私達が現役の頃、丁度大学は70年安保の最中で、大学はロックアウトされ、当時ノンポリだった私は時間を持て余し、よく仲間を誘ってはベルクハイムに泊まりに来たものでした。そんなこともあってなおさら、ベルクハイムへの思い入れがあるのかもしれません。

最近の現役はきっと忙しすぎるのでしょう。だから、ベルクハイムに目を向けてくれないし、もっと他のことで目一杯なのだろうと思います。別にそれを責めるつもりはありませんし、それが時の流れなのかなと思います。

でも、ベルクハイムはなくしたくない。もっと言えば、より良くしたい。そして、ふと思いついた時、現役、OB関係なく気持ちを休める場所であって欲しいのです。そのためにはベルクハイムをもっと整備し、食料とシュラフだけを持って行けばいつでも泊まれるようにしたいと言うのが目的なのです。

また、もう一つ感じたのは「月見の宴」の時、私達は「愁心の碑」を再築するという作業をしました。確かに、準備や運搬などきついものがありました。でも、自然の中での作業はとてものすがすがしいものがあり、楽しかったのです。ただ予定された行事に乗っかって、一晩泊まって帰るだけではなく、何かに参加するという満足感なのかもしれません。

こんな事もあり、ふと思いついたのが、この「OBで山小屋作業をしよう」と言うことでした。そのための前提としては、「決して力まず」だと思っています。



「無理せず」「楽しく」「迷惑かけず」をモットーに長続きできればと思います。

こんな単純な趣旨ですが、もしご賛同願えるならば、今後ご都合の良い時にいつでも参加して下さい。

この会の名前をいつまでも「山小屋リフレッシュ会」（仮称）としておくわけにもいかないので、言い出しっぺの私が

「山小屋酒場」

副題は「お代はあなたの労働です」

という名前を提案したいのですが、いかがでしょうか。別の提案があれば出して下さい。

さて、これからの作業予定ですが、以下のことを今後時間をかけて少しずつやれればと思います。（思いつくままに列挙してみました。）

- 1) 川原からの登り道の整備
- 2) 小屋周りのゴミの撤去
- 3) 便所の増築
- 4) 水場の整備、増築
- 5) 靴入れの新設
- 6) 道具収納箇所の新設
- 7) 囲炉裏の再築
- 8) かまどの再築
- 9) テントサイトの確保

- 10) 屋根のペンキ塗り
- 11) 傷んだ箇所への補修
- 12) その他

この中から今回は1)、2)を中心に、とりあえずやってみようということになりました。全部やれなくてもいいんです。とにかく気楽にやりましょう。

この中でも特に3)、4)は大事なのですが、簡単にはいかないと思います。今回は下見だけですが、しっかり設計しないと実行には移せないでしょう。また、現役の助けもいると思います。

以上、この会の趣旨と目的を、何の脈絡もなく羅列してみました。

要は、「楽しくお酒が飲めれば」それだけです。

(編者注；上記は、第1回OB小屋作業の現場で配布されたものですが、OB会報もこのままで結構とのご了解を得ています。)



第1回OB小屋作業登山道補修隊報告

参加メンバー A隊---島林(10期)、上馬(15期)、山上(16期)、岡部(18期)
B隊---坂尻(15期)、舟田(15期)、清水(16期)、中野(16期)
椿川(18期)

※ 2日目(5月12日)は小屋作業隊といっしょに小屋周辺の整備を行ったので省略いたします。また私(岡部)はA隊に参加した為A隊の行動を中心に報告します。

A隊(登山道偵察)

その日のうちに高三郎登頂、BH帰還ということで、出発を早め(6:30工学部集合)にした。(現役時代ならたいした日程ではなかったと思うが、今では・・・) ダムまでのアクセス道路の変貌ぶり、またダムサイトに新たに出来たコンクリート構造物のヘリーポート(後で上馬さんより教えてもらった)にびっくりしながらBHに向かう。ダムサイト沿いの道は思ったより整備されていて(山菜採りの人が多いせいかな?)とても歩きやすく感じた。途中高桑君(19期)の碑に一礼し、先を急ぐ。9:25頃、15年ぶりの我がBHに着く。建て替えて20年も経つと言うのに、どしりと建っているBHに、『久しぶりに会いに来たよ。』と声をかける。

これからが偵察隊の本番と再び気を引き締めて出発。新道登り口より、いよいよ開始。ここもダムサイト沿いの道と同様よく整備されていて、また、赤布等の目印も数多く付けられていて、作業の必要性はあまりない様に思われた。足に自信のあるOB精鋭隊も久しぶりの新道の急登にはアゴが上がったが、イワウチワ、ショウジョウバカマなどの山花に励まされ、登り続ける。(10期の島林さんはこの時点でBHへ戻り小屋作業隊と合流することとした。)750m付近より残雪が次第に多くなり、登山道偵察が出来ない状態となった。(10日から2週間ほど遅れていると思われた。)成ヶ峰分岐まではロボット雨量計が有るということで、作業の重点地区からは外してよいと思われた。

この分岐からクラコシ尾根に入ってから道は一変してブッシュ、ブッシュ。途中枝払いをしながら登ることを試みたが、作業も中途半端で頂上にも登りたいので、1時間程で切り上げた。昼寝岩付近の尾根の痩せ方は物凄く、登山道ごとコシアゲ谷に滑り落ちている所が数箇所あった。分岐へ着くと一面の雪、登山道偵察をあきらめて、高三郎山頂を目指す。

やっとの思いで山頂に着きあらためて雪の多さにびっくり、我を忘れて、『ボー』としているうちに雨が降りだしたので、帰路につくことにした。分岐直後のガレ場の荒れ方は激しく、ロープを張ってはいるが、登り降りには苦勞する所、補修作業には頭を痛めそうな所である。1059

ピーク、951ピークとも雪で覆われていて道は見えず、800m付近で修復隊の跡を発見した。以後作業の終わった歩きやすい道を下ることになるのだが、足膝が思うようにならず、転ぶこと度々、足腰の弱体化を痛切に感じるばかりであった。

倉谷川に下りたところで補修隊と会い、久しぶりの再会を確かめつつ、いっしょにB Hへ向かった。

B 隊（登山道補修）

小屋作業本隊といっしょに、食糧、小屋作業の道具、それに今夜の宴用のアルコールと老体には酷なボッカとなったが（？）、無事昼前にB Hに着く。昼食をB Hでとって、旧道登り口へ向かう。手には鎌、ナタ、ノコギリを持ち、慣れない仕事に戸惑いながら、それでもなんとか750~800m付近まで進む。ここからは登山道が雪で覆われていて作業にならないので、今回はここまでとし、作業を終了した。（休憩のビールがとても美味かった。）倉谷川の河原まで降りたところで、後から降りて来た偵察隊と合流、いっしょにB Hへ向かった。（18期椿川の報告より）

今後の小屋作業（登山道補修）

登山道整備は継続性が必要です。平地のアスファルト道の様に永続に使えるものではなく、自然主体の山の一部を我々人間が山道として借りていて、それを毎年々手入れするという考えで行わなければいけないと思います。

ワンゲルの小屋作業の意義について

1. ボランティア 活動の一部として-----一般登山者の利用の便を図る
2. 自分達の活動区域を明確にする。-----犀奥、白山は金大ワンゲルの主な活動区域（地域性）
3. ワンゲルの活動をアピールし、その社会的存在価値を認めてもらう。

（少しおおげさかも知れませんが。？）

最後に、現役部員、OBも交えた小屋作業を毎年続けることが必要であることをもう一度強調しておきます。（文責 岡部伸一）



OB小屋作業

15期 舟田 節子

「決心した。小屋番になる」の返信…私は楽しいジョークだと思っていた。小屋作業参加希望者に最後の連絡を送り、一段落。と、田村さんから

「先に、家財を送ったので、預かっておいて下さい。」

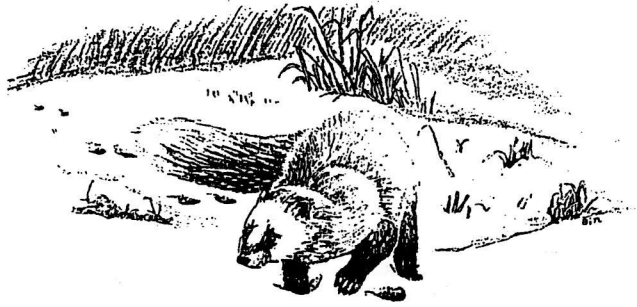
の電話。まさか、まさか…。コンテナが届く。中は、チェーンソーに、発電機かわりのモーターに、投光器??前日さらに海外旅行用のトランク!!!この企画は田村家を破壊したのではないのだろうか?彼のいわくに奥様は

「こんなうれしいことはない」

とにこやかに送り出して下さったのだそうである。私は、ワンゲル教祖様を、変人だの、奇人だの…そんな恐れ多いことなど口にはできない。だって、どの発信に対しても、即達筆で返信を下さる方だもの。そんな単純な事が、いかに「心」がなければできないことか…。だから、??や!!がわきあがる度に、かえって常識を厚化粧のようにはりつけてしまった我が身の方を反省させられてしまうのだ。

ともあれ、11日の朝は来た。大先輩は小立野キャンパスでゴロ寝されているはずだったが、結局はちょっと寄った昔の下宿のおばさん(つまりは、おばあさん)と盛り上がってしまったそうで、二日酔い気味でご登場になった。

頂上への偵察も兼ねたA隊(CL18期岡部、10期島林 15期上馬 16期山上)は約2時間前に出発している。二階建てのヘリポートのできた犀川ダムで、運ぶ荷物を並べてみると、作業道具に炊事関係、食料…にコンテナ、トランク。何か背を越す大荷物になってしまい、OBの篤志も現実の重量には負けそ!であった。ちょっとたじろいで、「そのあたりのボートは?」と浮気を考え、実際SCLの18期椿川さんが、ダム管理事務所に入っていった。と、所長は彼



のよく知っている方で、OKだったが、あいにくとボートはみな出払っているとのこと。観念して担ぐ…。

今年は雪解けが遅い。これまで見たこの時期の高三郎では一番に白かった。A隊は難渋しているか?それとも楽勝になってるものか?はるかな稜線を目で追ってみる。道の方は春先だから、まだブッシュがでていない。柔らかな土の匂い、優しく揺れるキクザキイチリンソウなどの可憐な花々。そして湖面の向こうの山々は新緑をはじめ様々の色相の緑が重なり、盛り上がりっぱかりだ。何も夏までじっと北アを待っていることなんかない。残雪と花の世界は、麓から始まっていくのだ。

見慣れた赤い吊橋の手前で一服。出島からのガレ場がどれだけ崩れているものかと思ったが、昨秋と変わらず、ほぼ落ち着いたとみなせそう。ここで16期清水さんと、中野さんが追いついてくる。清水さんは今朝は滋賀県の実家から出てきたそう。その出発時間が、県内穴水からの坂尻さんとたいして変わらなかったのにはびっくり。卒業以来の中野さんが、寡黙なのは昔のままだと思いかや、彼の方は(手記によれば)この時、皆の余りの変わりように声も出なかったというのが本当の所だったらしい。

(事務局長の方は、この苛酷な仕事柄、25年分は瞬時に記憶映像を修正できるようになりました。20年、30年分などもメモリ増幅しておりますし、誰と誰が同期であるかなどのデーターも豊富です。よって、参加にあたり誰も自分を知

らないのではないか？判別してもらえないのではないか？の懸念は不用です。）

倉谷部落に入った所で、引き返す梶さん夫婦に逢う。午後から町会育成委員の行事があってとボッカだけやってくれた。小屋にはA隊のザックが入っていたそうで、あちらも予定どおり行動している様子。

小屋にザックをドウと降ろし、昼食。サブザックにカメラ、ノコ、カマを入れて、B隊（CL 椿川 坂尻 舟田 清水 中野）発。

道々思い出してみた。現役時代、私はちゃんと毎年小屋作業に出ていた。あの頃は「強制」以前の「当たり前」のことで、「それは強制なんですか？」と訊ねさえもしなかった。やっぱり皆単純だったんだな。それに、毎度飯炊き女だった。ヘルメットをかぶってクリを取りに行き、その皮をむくだけで明け暮れていたような…。本当の実働部隊なんて初めてで、それをしかもOBになってからやるなんて、ほんとに何ていうのか、アホ極まるといったあたり。皆もそうみたいで、アホ同士が集まっている楽しさに朝から浸っている。

BHへ引き返す島林さんに逢った。新道の雪が出てきたあたりで引き返し、イワナを釣っていたとのこと。見事な戦果を見せてもらった。「BHには小屋の補修隊（CL辰野 吉田 吉本北川）がいますから」と交差したが、こうやって高三郎の麓で、往来してるのがワンゲル関係者ばかりというのがまた楽しい。

旧道上り口に着き、作業開始。ススタケも私の半端な力でとなると、カマより鋸の方が刈り易い。カメラというのは、作業前、作業後の比較写真を撮るため…だったのだが、実働をしない監督ならともかく、作業に夢中になると忘れてしまう。早い話がほんの上り口で撮っただけで、後は遅れをとり、皆の健闘ぶりは撮れなかった。OBでも修復作業に出ようっていうのはバワフルぞろいで…登りながら作業ってのは馬

力のごまかしようがない。しゃあない、より美しく…に方針を変える。鉋の斜め切りを「おお危ない！」と地表すれすれ、まっすぐに切り直したり、これから小枝が伸びる分も計算し、より控えてもらうべく補正をしていった。

そのうち私は、先行部隊が「男」ばかりであることを思いしる。彼等は樁を切っていないのだ。「きれいだから」の寛容が将来の禍根になることが、彼等には分からないのか！「だから男っちゅうのは…」バッサリ。「そういう半端



をやるから」バッサリ。「ヤブになるんよ」バッサリ。そのうち、枝の3-4本を切るより、根元からバッサリの方が効率がよいと気づく。たわわに葉を茂らせた樁の根元は意外に細いのだ。「こんな細い足して」バッサリ。何か根拠が怪しげになってきたみたい…バッサリ。

もう徹底的に遅れ、どうせ引き返してくるんだからと、こだわりだけで作業を続ける。それでも白雪姫ならぬユキツバキちゃんを抹殺する継母の太腕もそろそろ痺れ、樹相も変わってきて残酷物語もおしまい。あ、ポツツときたかな？と思ったら、皆が降りてきた。800mから上は雪で仕事にならず、A隊を待っていたが、もう引き上げ時刻に近くなったからとのことで、その雪で冷やしてあったビールを出してもらった。おいしい！そう、現役だった頃は作業してすぐビールなんてなかったよ。真面目一途だったものの。

おなかもキューと痺れて、下山する。手かかりにする枝もないと自賛しながら、河原に降りつく。あたりにはおいしそうなコゴミが茂っていて、坂尻さんが手慣れた鎌で刈り取ってくれた。と、A隊が降りてきた。今回のためにわざわざ軽登山靴を買い直した岡部さん…ということは、今もやってる白山3時間半往復はズックでやっていたんだ！やっぱり卒業以来の山上さ

ん…威厳をつけるのに口髭はやしたんだ！そして同期の上馬さん…それこそ同期で顔を会わせる機会が多いけれど、山で会える嬉しさは格別。ワッと話に花が咲く。彼等も700m付近まで作業しながら進み、そこからは雪になったので登山に専念したが、頂上は2時になったようだ。トランシーバーは間に合わなかったのだが、雪の上に足跡が残っておりB隊が引き返した地点はすぐ分かったそうだ。きれいに刈り開けてあるのにびっくりしたと言ってくれたので、私はうんうんと満足していた。

小屋に帰りつく。階段が見事に補修されていて感激。そしてバケツの中の雪で冷やされていたビールがまたおいしかった。ここで椿川さんがお帰り。忙しいのに、SCLということで、日帰りでもフルに作業していつてくれた。

明るいうちに少しでも…と夕餉の支度にかかる。小屋まわりに伸びていたタラの芽も天麩羅の材料に加わる。みんなあいかわらずよく働き、ツーカーで、パッと連携動作ができていくのは本当に気持ちがいい。先のコゴミ、タラノ芽、ウドノのトンボ（先端）、サツマ芋を次々に北川さんが揚げていく。イワナ釣りの次には植物採集もやっていた島林さんは、上馬さんにお伺いをたてては、揚げてみて試食。イワナが焼き上がり、3べん間酒を回した後で身はつつ

くもんだ…とか、OBになってからの雑学がワイワイ飛び交う。ウドのキンピラ、花ワサビの醤油漬け、ホタルイカとワカメの酢味噌和え、蛸のワサビ醤油と、持ち込みの肴も、BHの床狭しとばかりに広げられた。これまで知っている人はなかなかいないと、上馬さんのイラクサ炒めもさらに加わる。

山小屋酒場のいよいよ本番。ダムに残してきた荷物を無事回収してきた田村さんの、倉谷ユートピア計画に、島林さんの「いつかある日」の詩に感激して下さった話…。あとは昔ながらにダラ話で笑い転げて、定かに思い出せない…何か…清水さんが「天皇家の3人の子供。あれみんな美智子はんの生んだ子やと思いますか？」とやってたような…。昔の張談とは一味違う。皆、結婚もし、人の子の親になり、そして社会での矛盾にもいきあたりながら…何か皆、穏やかに優しくなった。思いがけず持てたこの時間をグラスの中にあるがしながら楽しんでいるような優しい雰囲気漂っていて…35周年にしろOB会にしろ、この小屋作業にしろ、どこかにまだわだかまりの残っている私にとっても、あよかったと素直に酔えた時間だった。とはいえ、朝からの重労働に徐々に沈没…。外は雨…。



12日。さわやかな雨上がりの朝。干鰯を焼き、ネギとナメコのみそ汁、漬物、梅干し。そう、OB小屋作業は、「真の贅沢を問う」がサブテーマなのだ。さて、今日は…。早帰り組もいるし、登山道の方は雪が出てくる所まではやってしまったし。16期組は小屋までの道の仕上げにかかり、他は小屋周りの整備と水場の下見にかかる。クマ笹を刈り開けると、やはり昔のテン場の跡が出てきた。あと二段、テン場にしてあったはず。持ち帰る予定だったホースもかなり重い。燃やしてみたらちゃんと燃えた。焼き場は穂積さんの担当。余熱で乾かしながら、次々焼却処理。その間に吉本さんは残雪を確保にいかれて、山小屋酒場は冷え冷えビールでメインテーマをまっとうする。

コーヒープレイクの後、早帰り組島林さん、清水さん、中野さん、山上さんと、ダム事務所に町着を預ける田村さんが出立。代わりに大島さんが到着。辰野さん、大島さんの水周りエキスパート組が水場を偵察。ついでに配管ルートをざっと刈り開ける。この時の岡部さんの猛然パワーは、さすが白山3時間半往復を納得させるものだった。私か例の如く「おお危ない」とスス竹の切り直しに専念していると、「このルートはちがう」の声。エーッ！仕方がない。ダイエットダイエット。

続いて南さんと鳥越さんが登場。昨秋月見の宴に参加しているトリさんは、登り口の階段にも、広々した小屋周りにも感激したそう。そう、やればできるんよ。

トリさんは午後8時頃に椿川さんから掛かってきた電話で、閉店ギリギリのスタンドへ走り、どうにかチェーンソー用の混合ガソリンを購入できたとのこと。坂尻さんによれば、チェーンの過熱止めにもう一種オイルがいるのだから…でも、田村さん一人で危ないものを使われても…何か皆曖昧な笑みを浮かべて黙ってしまった。

彼がもう一つ「下界」から運んできてくれたのが、昨日の夕刊で、小屋作業のことが意外に大きく出ていた。取材の経緯は拇さんから聞いていた（林さんから紹介された記者が、拇さんの所へ取材に来、写真も借用していったこと）。記事になっているのが、嬉しいような、しかし見にもきていない人が去年の写真で、でかでかの記事にしているなんて…いやはや。

昼食後はベンチ作り。木を切り倒し、皮をはぎ、切り込みをいれて脚部と組む込ませる。上馬さんが

「こういった小屋作業を自分達の代だけがやるのではなく、若手OBにも伝えていかなくては」と言い、私も同感だったが、強制できないものをどうしたら？



登山道は行政に押しつけているだけでは維持できない。その道を「愛する」人達が、継続して補修していくことが大事なのだ。私は百名山を走り回るような人達にも言いたいのだ。そんなに山が好きだったら、どこか一本の道でいいから整備してみませんか？それが山を愛することでしょう？

作業具を清め、錆止めを吹きつけ、床を雑巾掛けして出立。降りた途端、岩魚釣りにきていた12期大出さんに会う。そして引き返してきた田村さんにも。あの話好きな田村先輩、一人で大丈夫かしら？

楽しかった小屋作業は終わった。事務局長としては、早くも「次は？」「どうしたら？」が湖面のゆらめきと重なるのだった。

「山小屋酒場」雑感

10期 島林 仁司

BH周辺を訪ねたのは、30年ぶりだったでしょう。天候にも恵まれ、御蔭様で楽しい一時を過ごすことができました。BH行きのキッカケとなったあの詩…。そしてOB会をここまでもってこられた皆さんの情熱と努力に深く感動致しました。筆不精の私が一言感謝の気持ちを伝えようと思っているうちに先を越されましたね。（编者注；感想の原稿依頼があったこと）

写真と分県ガイド、有り難うございます。写真を見ながら読んでいとわくわくしてきます。膝が回復すれば、近畿外の山へもボチボチと考えていましたが、これで第一候補になりそうです。

「無心」となれば、時として意外な結果を得る。今回のイワナ釣りもその一例でした。アマゴなら天然ものを含めて釣ったことはあったんですが、イワナは全く初めて…。それに水面を見た時、こんな所にニジマスがおるんかいな…



？それにしてはきゃしゃだなあと思ったほどの奴。足下まで釣り上げた時、糸がプツン…。魚に夢中で竿は身代わりとなって水の中へ消えました。

その魚は皆さんの前でヒレ酒となって歓迎してくれました。身を呈したイワナに感謝して頂いたことは言うまでもなく、不必要な殺生をしなくてもすんだ事に思いを寄せて…。もちろんホタルイカ、花ワサビの醤油漬け、山菜の天麩羅等々。とても山奥の酒場とは思えないくらい豊かな酒の肴があつてのことでした。本当に濃やかな心遣いにつつまれた「山小屋酒場」でした。

ふと思ったこと

わずかな期間に生命を育み、思わず手をさしのべてみたくなるようなカタクリの花。御一緒した上馬さんに道々、山菜など草花を教えてもらった中に、そんなカタクリの花がありました。

以前倉谷の集落が残っていた頃は沢山あったが、それも樹木が茂れば消滅するとの事。学生時代に全く記憶がないので…当時を思うと残念です。BH周辺でやっと4株見つけたのに、それも葉を1-2枚残して天麩羅の材料にしてしまい心配です。

そんな訳で、BHの前でカタクリを育ててはどうか！と。もちろん自然保護上問題がなければです。上馬さんからカタクリの繁殖について



は聞いてなかったのですが、もし秋に球根を植える必要があるのなら、早速今秋にでも田村さんを訪ねる時に予定します。この時が現役の小屋作業と一致すればいいのですが、現在のところ、未定です。

それでは「愁心」の碑を心のよりどころとして、又の日を…。

お誘いに応えて

自然の中に溶け込み太陽のもとで息する

まるで田村さんのような姿を描いて
大阪の地で人混みの中で

うめき、ため息、ねたみ、うらみ、そしりを遠ざける日々…。
一体何を求め、何の為なのかもわからず
毎日を息する。

自らの息を感じる時、

ふと我が身をふりかえる
遠くの友、古き人、未知の世界。

1996. 5. 26



ホオジロ

酒を飲むコンディ ション作り

16期 山上 正彦

山小屋に入る楽しみの一つは、夜半まで酒を飲みながらよもやま話することなのだが…。入山する前の日は睡眠時間が3時間という強行軍、おまけに高三郎のピークまで偵察に行ってきたため、疲労困憊、フライングして酒を飲み始め、いつのまにか高酔。目が醒めたらもう11時近くで、皆寝支度。小生一人目がバッチリではしょうがないので、再び酒を流し込んで、シユラフにもぐった。

次回こそ十分な睡眠をとって、仕事量も程々にして、良好なコンディションで酒を飲むぞ。つまみも牛スジか何か作って持って行こうかな。変なものを食べておなかを壊しても、大丈夫。

小生が診てしんぜよう。ただし15歳以下に限る。

《編者蛇足…上記は精神年齢を含むと拡大解釈をしましょう。》

* 13期 吉田 徳積

BHにたどりついてまず一杯、昼食時にまた一杯、小屋作業を終えてはまた一杯…と、たっぷりの休憩（私だけかもしれないが…）をとりながらも、一応BHへの登り口の整備を終えることができた。

夕食は舟田さんの手によるタラの芽の天麩羅はじめ色々な山菜料理、はたまた島林さん即席手製の釣竿による岩魚の骨酒など、今まで経験した事のない「味わい深い」山小屋作業でありました。皆さんに感謝します。

山靴も、ニッカボッカも、ザックもどこかへいつてしまったけれどシュラフだけは宝物のように大事に保管してあった。今、そのシュラフの中で約20年ぶりのベルクハイムの夜を迎えようとしている。周りの寝息を聞きながらシュラフの中にうずまっていると懐かしい思い出が次々に蘇ってくる。雨で何日も沈殿させられた夏合宿の聖平、その沈殿明けの朝に峠から息を吞んで眺めた富士山、寒くてガタガタ震えて夜中に何度も目を覚ました春のシゲジ、そして何時も馬鹿でかつこ悪くて気のいい仲間達。もっと昔のみんなに会いたくて、昔の馬鹿な自分に戻りたくて、ずずーっと深く潜り込むタイムマシーンの中。

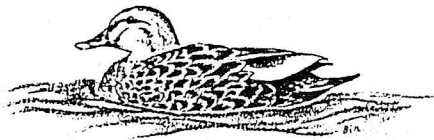
突然の清水からの電話に条件反射的に「俺も行く」と答えてしまい、週末は山小屋作業に参加することになってしまった。だいぶ前に案内文書が来ていたのを思い出した。どうしようかと迷っているうちに返事をだすのを忘れていた。そのうちにすっかり記憶から消えていた今回の催しへの参加が電話一本で決まってしまうのだから相変わらず単純な男だ。さあ、それからが大変だった。卒業以来、山から遠ざかっているため山道具が何も無い。靴はどうしよう、ズボンは、ザックは。シュラフだけは愛妻(?)がクリーニングに出して大事に押し入れに仕舞っておいてくれてサンキュー。靴は通勤用に買った980円のテニスシューズ、服は会社の作業着、ザック代わりはディスカウントで1980円で買ったアルミの背負子という不格好な姿で出かけることになってしまった。それにしても前の日の夜、興奮してなかなか寝付けなかったのは私だけだろうか。

「こんにちは」と挨拶したけれど何かおかしい。遅れて出発した清水と私は休憩中の先発隊に追いついた…と思った。でも知らない人達のような気がする。向こうも何か不思議そうな顔をしている。一瞬、焦ったがその中によく北川の顔を見つけて一安心。20年の歳月は恐ろしい。美男も美女もこんなに変わり果てた姿になろうとは。

昼食後、夜の酒代かせぎの一仕事。ナタと鋸を腰にぶら提げて旧道整備へいざ出陣。急勾配に喘ぎながらもナタを振り回し、鋸を引きまくりの縦横無尽の大仕事、久し振りに良い汗をかいだ。800m付近からはまだ雪が残っていて作業ができず今日の仕事はここまで。天然冷蔵庫で冷やした極楽ビールの味は格別だった。

山の朝の空気はやっぱり美味しい。夜来の雨も上がり天気は回復の兆し。「よし、行ってくるか」とスコープを肩に、ロール紙を手にとって久しぶりの雉撃ちに出かけた。倉谷川の流れを前に、前方の山を眺め、朝日を浴びながらの雉撃ちは一発大狸だった。

ダムからの高三郎を何度も振り返って眺める。今回は残念ながらその頂には立てなかったけど、無事なおまえの姿を見て安心した。秋には必ずまた来るからその時まで達者でな。俺もがんばるよ。



*

13期 南 梅子

25-6年ぶりのBH。懐かしさと不安の入り混じった複雑な気持ちで山小屋酒場に申し込みました。もう随分と歩く生活から遠ざかっており、道も相当荒れていると聞いていたので、歩くのはダムからではあっても、やはり不安でした。

案の定、一人ではとても行けない所を、人間複数になれば心強いもので、同行して下さった鳥越氏のおかげでたどりつけたようなものです。手とり足とり導いて下さったからこそです。

(こんなおばさんにもかかわらず…)

前日の雨で道はぬかるんでいたものの、よい天氣に恵まれ、ダム湖の青緑や、若葉の木々を抱いた山々は20数年前と同じで、目を楽しませてくれました。

BHの登り口の階段には驚きました。丁度よい歩幅高さで上り易く、前日のご苦勞を感じながら、一步一步踏みしめ上りました。

今回は日帰り参加で、BHにいたのはほんの3時間足らずでしたが、何よりよかったのは、ワンゲル仲間の雰囲気浸れたこと…。初対面のOBの方とも、もう何年も前からの知り合いであるような、ワンゲル独特の空気に触れられたことでしょうか。

しばし現実の世界から離れ、タイムスリップしたような時間を過ごし、タイトルの仮称どおり「リフレッシュ」させていただきました。お世話下さった役員の皆様、ありがとうございます。

*

13期 吉本 良治

わずか2時間余りで25年前にタイムスリップできる場所、それが我がBergheimである。20数年ぶりに訪れた昨秋とは異なり、今回はダムサイトからBergheimまでの道のりは昔のように軽やかであった。

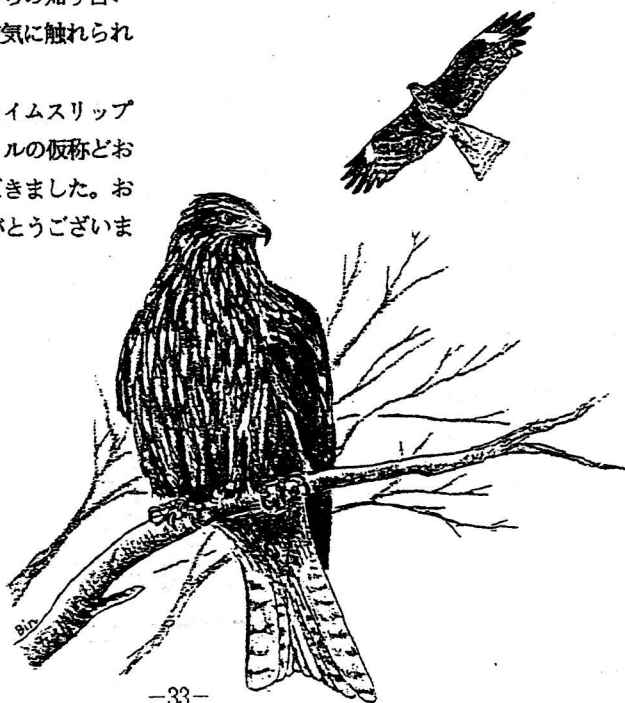
昨年は例年以上の積雪であったため、修復した「愁心の碑」の状態が気掛かりであったが、無事であり、ひと安心した。

好天に恵まれ、小屋作業は順調。それ以上に苦勞して荷揚げした差し入れのビールは最高の味であった。鮮やかな新緑、労働の汗、採れたての山菜、冷えたビール。まさに「山小屋酒場」の最高条件であった。

秋には「カサカサ」と落葉を踏みしめて歩くことができることを楽しみにして、また参加させていただきます。それに秋の味覚と「お酒」を期待して…。

そして数年後には、昔のように「かまど」で飯を炊き、「囲炉裏」を囲んで語り明かすことができることを夢見て…。

気長にのんびりとやりましょう。



*第1回OB小屋作業に参加して

23期 鳥越 伸博

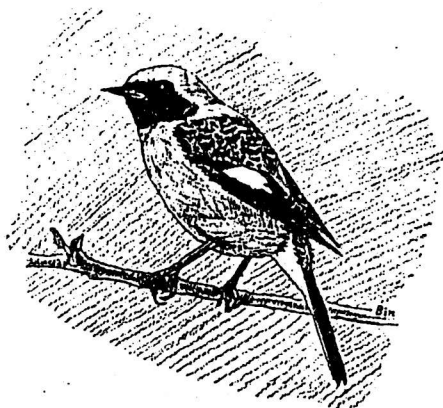
2日目だけの参加で、途中で水上谷の増水等もあり、BH到着が11:00頃となったため、ほとんど作業らしきものもせず、今回の記事が載っている新聞と田村さんがお使いになる予定のチェーンソーの混合ガスリンを持っていっただけでしたので、感想といっても「ウン」といったところなのですが。

ただ、逆に言うと、今回の私のような参加の仕方でもどうぞと認めてくれる、ほのぼのとした雰囲気の中で気長に続けていけたらいいんじゃないか...というのが、率直な感想かもしれません。

こういうことを書くと、上の方の方々からは大変なお叱りを受けると重いますが、少なくとも私達(23期)ぐらいから下のOBにしてみれば、BHというのは既に出来上がっていた存在であり、先輩方が全て1から作ったのだよと教えられても、自分達という愛情みたいなものに今一つ欠けてしまうという面は心のどこかにあるような気がします。

ですから若手(?)OBの一個人的な希望としては「BH修復」「高三郎登山道整備」を大上段の目標ではなく、OB会の活動の輪を広げる一手段として位置付けていただけたらなあと勝手ながら思います。

私自身としては楽しい集まりでしたし、今後とも都合がつく限り参加したいので、よろしくをお願いします。



北国新聞 夕刊

平成8年(1996年)4月3日(水曜日)

(2)

昨春、仲間と高三郎山へ登るため、犀川上流の旧倉谷にある小屋に泊まった。夕食に付近で採ったカタハヤドといったなじみの山菜に加え、ウバユリの茎もスライスして出した。実は自分自身、初めてだったのだが、恐る恐る口に運んでいた旨の評判も上々。サクサクして、にびったりの食感であった。

山菜といえば、ゼンマイやワラビ、ウドなどがすぐに思い浮かぶが、食べられる野草はほかにもたくさんある。例えばゴシヤクやハナイカタ、ゴマナ、身近なところでは雑草として嫌われるアカサやスベリヒエ、カラスノエンドウなど。食料難

山菜考



数年前に地元の出版社から出した「山菜・木の実ガイドブック」も、そういった趣旨で作った。

梅 典雅
(すかんぽの会・県環境政策課専門員)

の時代にはよく食べられたというから、(存在)の方も多いはずだ。近頃は人気のある山菜は乱獲気味というところもあり、これらの忘れられつつある食用野草にも親しまうようになっていく。

たものだ。たゞ有名な山菜でも希少なものは省いたかわりに、身近な野草を多く取り上げ、全部で百種以上を紹介している。あまり知られていない山菜を正しく識別し、創製士までおいしく食べることが一興であろう。

もちろん、植物の生育にダメージを与えないように、採り方は人間の食物のほかに、他の生物の命を奪わないことには得られないことも事実である。春を待つて懸命に伸びようとする若芽を折り採るときに感ずる小さな心の痛みといったような感性を、今、とても大切に思う。

(金沢市)